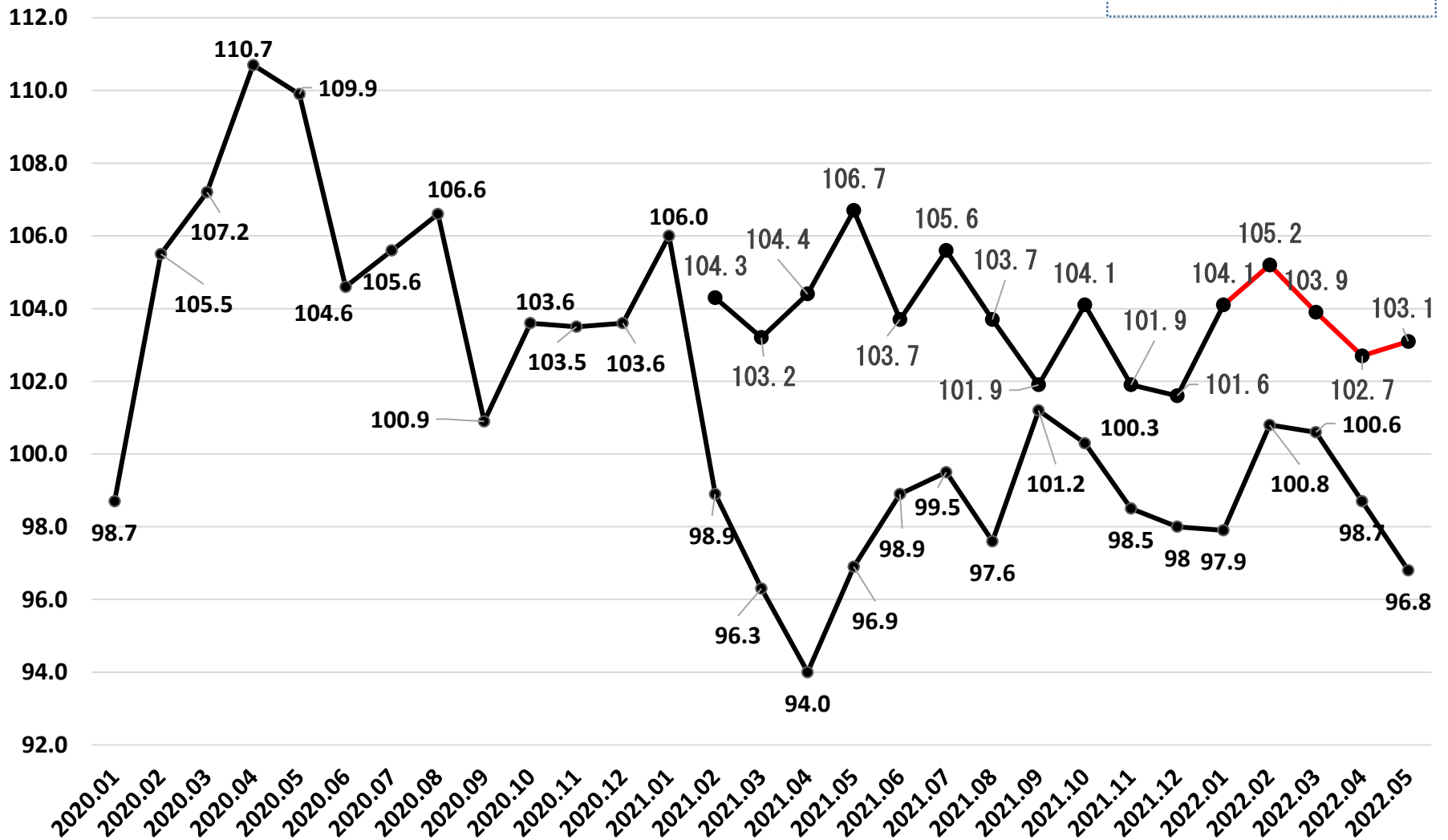


スーパーマーケットを取り巻く環境と取組について

2022年7月4日（月）

スーパーマーケット売上推移(総売上高・既存店昨比)

既存店昨比の推移



出典：スーパーマーケット統計調査資料より

スーパーマーケットの販売動向について

◆2020年の動向

- 新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言や学校一斉休校の影響により内食需要が急拡大
- 買いだめが発生。冷凍食品やレトルト食品、パスタや缶詰など保存の効く商品に特需がみられた。家庭内での食事も増え、牛肉・豚肉、鶏肉などの需要も拡大
- 一方で、惣菜は感染対策としてバラ売り販売を中止する企業が増えたことに加えて、行楽需要も減少。揚げものや弁当などを中心に不調であった
- 前年に比べ、客単価(買上点数・1品単価)が上がり、客数が下がる傾向であった

◆2021年の動向

- 前年特需のあったカテゴリーでは反動減があったものの、内食需要は継続
- 一方で、家庭内での調理疲れがみられ、惣菜や簡便商品、冷凍食品が好調であった
- 生鮮食品では、相場の影響で苦戦がみられた。特に畜産は、昨年反動減に加えて、輸入肉の高騰の影響もあり、売り込みにくい状況となった

◆2022年1月～5月の動向

- 冷凍食品や簡便商品、惣菜など調理を必要としないカテゴリーの商品は堅調
- 水産は漁獲高の減少・燃料費の高騰による全体的な相場高の影響で、店舗は売り込みにくい状況、売上は苦戦
- 畜産は輸入肉相場の高騰の影響を受けて販売苦戦。加えて前年の内食需要の反動でひき肉、加工肉も苦戦
- 食品値上げの影響で1品単価は上昇する一方で販売点数は減少傾向。加えて、新型コロナウイルスによる行動制限が3月に解除されて以降、客数減少がみられる

◆標準化と共同利用の推進

(1)流通BMS

- ・消費財流通業界で唯一の標準となることを目標に策定しているEDI標準仕様
- ・使用頻度の高い「発注、出荷、受領、返品、請求、支払い」の6業務をEDI対象として標準化
- ・製、配、販共通の業務プロセスとデータ形式により、工数とコストの削減が実現
流通サプライチェーン全体の最適化を促進する

(2)「スマクラ」の利用促進

- ・流通4団体と連携し共同利用型EDIサービス「スマクラ」の導入を推進
- ・200社以上の小売業で導入。サービス型システムの共同利用に移行しつつある
- ・2020年は一部カテゴリーにおける需要予測型自動発注システムとの連携サービスの実証実験実施
- ・2021年にはクラウドサービスとして電子帳簿保存法に対応、今後電子インボイス対応予定

(3)物流標準クレート

- ・2009年より物流クレート（食品流通業界で通い箱として使われているプラスチック容器）の標準化事業を開始。
- ・保管スペース縮小、積み替え作業不要、配送効率上昇など作業効率、生産効率が向上。
- ・2021年度は、日量約25.2万枚、年間で約8300万枚（前年差+約300万枚）流通